

スポーツ&レジャー教育の方向性と課題 (3)

栗原 毅^{*1}

The Object and Problems of the Sport & Leisure Education 3

by

Tsuyoshi Kurihara

Abstract

The results of this examination are :

- 1) Sport & Leisure Education is essentially rather “mission” than education, as it aims the transformation of value of each student. In this context the concept of Sport & Leisure Education differs from current notion of education, which is mainly focused on the delivering the knowledge and method in human societies.
- 2) Analyzing the methods of religious education, a concept of Compromise could be adopted to the field of the Sport & Leisure Education.
- 3) Three elements are brought about through the considerations :
 - A. A teaching staff of Sport & Leisure Education may possess rather the personal persuasive ability, than logical / rational ability.
 - B. The task of a teaching staff of Sport & Leisure Education may be to suggest the wide-ranged possibility of areas and let them choose the action, which may lead to the realization of the “Moment of Existence” which is the ultimate goal of this party.
 - C. A method of intellectualism as an expedient way should be considered. It may make a wise “soft landing step” toward the realization of Sport & Leisure Moment.

I はじめに 意図と構成

- 1 本論文の意図 = 自律価値教育の実現可能性＝
これまで筆者はスポーツ&レジャーを高等教育

領域として教育するという営為について数次にわたって考察してきた。初めに、スポーツ&レジャーを「実存の瞬間」と概念規定した久保の宣言¹⁾を援用して、この概念の教育適用上の問題点を指

* 1 東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

摘した。すなわち：

- 1) この概念は行為者がある瞬間に感得する心理的境位であり、どのような実践に際しても存在しうる。すなわちスポーツ&レジャーは対象化可能な領域を持っておらず、教育作業上の目標と目的を設定することに難があること²⁾。
- 2) 従って、知識知を伝達することが難しく、評価が計測できないことを指摘した。²⁾
- 3) 次いでスポーツ&レジャーをマネージするという語の内容吟味を試み、一般的なマネジメントが所与価値を実現する手段の集合体であるのに対し、スポーツ&レジャーは自律価値であり、スポーツ&レジャーをマネージするという技は手段化不能な「実存の瞬間」を対象化する試みであり、概念矛盾に近いこと、この実現には行為者・学習者がこれに「内発的に気付く」ことを待たねばならないことを指摘した。³⁾。

この連続稿は、この課題を中心に据え「スポーツ&レジャーをマネージする」という概念がもつ教育実践上の課題について考察してゆくものである。

本稿では、スポーツ&レジャー教育を実践する際に生じうる障害の本質を提示したうえで、それを克服する3種の方向性について吟味する。

2 本論文の構成

本論文では、まずスポーツ&レジャー教育の原理が「説得」という理性の技ではなく、宗教的な「伝道」に近いものであることを示し、これが障害の遠因となりうることを示す。さらにその障害の症状が「手段喪失」であることを提示する。ここで主題は「心理的境位のようなパーセプショナルな価値をいかにして教育する」ということになる。その後、この課題の克服可能性を持つ3種の方向性を挙げ、それぞれを批判的に検討したい。

Ⅱ スポーツ&レジャーの原理的課題

- 1 「具体なき抽象教育」という壁 = 自律価値という原理に起因する、教育領域と手段の喪失＝
まず、スポーツ&レジャーの定義と自律価値テーゼを確認したい。

- 1) 定義：「スポーツ&レジャーは、活動に没頭す

る行為者に訪れる至高の瞬間である。」

- 2) スポーツ&レジャーの自律価値テーゼ：「スポーツ&レジャー行為の価値は自律的なものであり、ほかのいかなる上位価値も存在しない。他の価値実現を目指す『～のための手段』ではない。」

一方で、教育現場の日常は、ほぼ手段の塊である。背景となる教育理論がどのようなものであれ、それを実践するには具体物が必要である。教育機関の多くが掲げるいわゆる教育目的には、高邁な理想や抽象的な「平和」「愛」などの字句が頻出するが、現場では教科と教材、領域知と手段がなければ教育は機能しない。「数ⅡBを習う」ことと「全人格を陶冶して円満な社会人になる」こととの間には理論的な結びつきなど存在しないのである。教育目的と個別的教育実践活動の間には乖離と緊張が存在している。

従ってここには常に「～を通じて」という語で接続される弥縫策が介在する。「スポーツを通じて良き社会人となる」「歴史を理解することによって現代社会に生きる力を得る」。これらの麗句はいずれも、ひとまずなるほどと思わせる。類似の教育上の惹句はよく見聞するが、スポーツと良き社会人の間にはつながりはない。ただ間に「～によって」という語句を置いただけである。論理はない。教育目的と教育実践の間には理論的つながりは必ずしも存在しないのである。

どの業界・領域にも多かれ少なかれ存在する、理念と実践の乖離という問題がここにもある。

2 滑稽なる孤高 = スポーツ&レジャー教育の偏頗＝

ところがスポーツ&レジャー教育ではこの呪縛は原理的に存在しないのである。

スポーツ&レジャー体験の瞬間は「良い社会人となる」ための手段ではなく「円満な人格を涵養するための」道程ではないと宣言する。自律価値はそれ自体で至高であり、教育目的そのものである。「実存の瞬間」は、その行為者がその瞬間「なにをやっているのか」を顧慮しない。スポーツ&レジャーは「もともと」現場的な教育領域と手段を持たないから「～のための」「～によって」

いずれも存在しない。

A と非 A の両者があるから関係が生まれる。

片方しか存在せねば関係は発生しない。

乖離という関係自体がありえないのである。

3 価値の押し付け = スポーツ&レジャー教育の態度 =

スポーツ&レジャー教育は知を伝達しない。手段を教示しない。領域を持たない。持つものは「実存の瞬間価値」の称揚である。

この点でスポーツ&レジャーという概念は宗教教義に類似している。

いったいに、現代では教育は知の伝達である。ところがスポーツ&レジャー教育は知を（教科を）拒否する。実存の瞬間を自律価値と称して共有を求める。実存の強要である。スポーツ&レジャー教育が現代の価値中立的な主知主義教育から偏波していることは明白だろう。

価値の押し付けは現代では広範に嫌悪される。しかし教育に価値はつきものである。逆に言うなら、スポーツ&レジャーは「棚上げにされ／見て見ぬふりをされ／がちな、価値教育を正面から見据えようとするイデオロギー」であるといってもよい。

要約してみる。

- 1) スポーツ&レジャー教育には「実存の瞬間を感得する」という目的のみ存在する。
- 2) スポーツ&レジャー教育には対象領域がない。従って設定すべき教育目標がない。
- 3) スポーツ&レジャー教育は「価値の押し付け」である。

理念のみ讃えて現場を顧慮しない。その上「実存の瞬間」とやらの価値を強要する。これはおよそ現代の教育現場で活動をする者にとっては空疎な絵空事である。

そんなことができるのだろうか。

以下では、スポーツ&レジャーの原理と教育とがどこまでお互いを矯めて「譲歩」し、方便としての価値教育が実践できるかについて考えたい。

Ⅲ 伝道から伝達へ

1 曖昧さは教育の本性

スポーツ&レジャーが「実存の瞬間」原理に拘泥する限り教育の実践現場は設定できないことを論じてきた。

一方で、抽象と実践の矛盾を現場でうまく処理してきた例は別に珍しいことではない。

矛盾容認は古今東西どこでも行われきたし、容認は曖昧さと同行する。教育の現場では、この種の原理主義的主張を「ほどほどに」あるいは「曖昧なままにしておくことで」実践してきた。例は数多い。

先にも述べたが、教育の現場は手段の塊である。指導者は「今そこにある課題」を解決することが喫緊で、高邁深淵な目的などいちいち考慮しない。学習者にとってはなおさらである。今そこにある作業以上に思いをはせる余裕などない。当該社会での「人としての価値」のことなど遠くも近くも関係ないことである。

教育理念と実践の相克についてこれ以上語る必要はないだろう。ほかのすべてのリゴリズム・リアリズム間闘争と同様に、おびたしい融和と妥協で構成される。

教育の原理と実践との相克を鳥観するかぎり、曖昧さはすでに自明であるといってもよい。無論、この中には、個々の学習領域から一定の距離をとった・あるいはとり、「理念と実践の矛盾を程よく調和させた」曖昧さを特徴とする手法も出現する。

この点で宗教の伝道と教化とスポーツ&レジャー教育は酷似している。以下では、宗教教育上の曖昧化手法とスポーツ&レジャー教育のかかわりに検討を加えてゆきたい。

2 「伝道」という自律価値伝達の原型

宗教の伝道は至高の自律価値を他者に伝え、共有者を拡大しようとする営みである。古今東西至る所に見られる。宗教者に訪れる恍惚の時：ペテロの回心や日蓮の覚醒、親鸞の六角堂夢告、オルレアンの少女に下った神命など、宗教者があの一瞬のうちにこそるべきヘンシンを遂げる。この瞬

間は至高のものである。それを伝えたい。伝えるのが使命である。

超越的な自律価値であるサトリやカミの顕現、その恍惚と至福をどうやって「無関心で無垢な一般人」に伝え、共有するか⁴⁾。一步進んで、カミ体験への道を志向してはいるがまだ疑いを捨てきれないトマスの輩にどうやってこの福音を「腑に落とせる」か。心理変化装置が必要である。教育が登場する。

宗教教育は、当該価値観を感得していない「無垢なるもの」と修行サポート者で構成される。修行サポート者は、善智識とか機縁者とか牧夫とかパードレとか呼ばれる。無垢なる者がこの至高瞬間を得る環境を整える導き手である。つまり、超越と現実の問題は宗教者とその弟子の間で常に教え・聞くという形態をとる。(原始仏教や理神論、悉皆同朋論などの少数のラディカルな例外は存在する。)

「どうやって修行者に唯一神(あるいは弥陀・縁など)を自ら感得せしむるか、は唯一最大の教育目的、アルファでありオメガである。

しかし「回心への論理的な方法」などない。ペテロは理屈でなく突然の啓示で信仰を大転回させた。親鸞は修行の果て聖徳太子の夢告で絶対他力に目覚める。免罪符や聖地巡礼で「完全免罪を得る」とされるのは現世の宗教権威が「そのように決定したから」という以外に根拠などない。禅はそもそも不立文字として言語的コミュニケーションを拒否する。

このような条件下でも宗教は「教育」されてきた。なぜか。曖昧さを容認したからである。

教義の厳格さと教育の曖昧さがいつのまにか「ある程度」調和されてゆく。原始仏教教団は個人対個人の語らいが中心だったが、六師外道と混交して大規模な「教団」を拡大する。ローマンカトリックはローマの神々と同期することで現世化してゆく。

本稿はそのプロセスを実証するものではない。しかし、宗教集団が組織化されるにつれて、ミオシエが体系化され「教育」の相が深まり、伝道が

研究に変化し、感覚的説得が論理に道を譲った例は枚挙にいとまがない。その過程で自律価値称揚が後退してゆくことも自明といえるだろう。

3 教育 = 伝道から伝達への曖昧な道 =

さて伝道という自律・他律の価値変換作業は基本的には個人対個人のいとなみだった。これを教育では、集団を対象にして効率的に価値提示を行おうとする。学習者個々人が、目的とする「魂の転回」を遂げるかどうかは不確定になるが、多数を対象とすることでその不確実さを補おうとするものである。宗教教育が始まる。

宗教教育は伝道と異なり、学習者に批判精神が育っていないところから始まる。「汝の若いうちに**を探せ」を標榜し、若い学習者にはドグマを自律価値的前提として用いる手法がかなり効果的である。「神は愛だからあなたも友人を愛しなさい」「良いことをすれば極楽に行ける」。検証も反証も不可能な教義(ドグマ)を絶対視してそれを自律価値とする。教育者の人格や権威に多くを頼り、理性によらぬ説得手法を駆使する。

ここで新しい視点「数多くの学習者の中からわずかでも「転回者」が出てくれればよい」という論理が出現して、伝道が個人対象から集団対象に変化する。それに伴って個人の魂の変化は背景に後退し、かわりに集団としての社会との調和という課題が重要になってくる。宗教に道徳が加わるのである。かくして「社会的価値との共存」が図られ、自律価値の感得は教育目的のどこかに棚上げされ抽象的に提示されることとなる。自律価値は多くの教育現場で社会倫理という価値との融和を余儀なくされ、他律化への危険性を懐胎する。組織拡大と宗教教育担当者が産婆となって現実主義的曖昧さを産み出すのだ。

教育は自律価値を曖昧化・他律化する。スポーツ&レジャーも同様である。

少し視点を変えてみよう。

仮に教師と学習者がともにスポーツ&レジャー体験の感得を目指しているとする。領域は「なん

でもいい」。手段は「ない」。このような条件下でスポーツ&レジャー瞬間を感得させるには、生活のあらゆる領域で臨済禅の公案のような「やってみせて突き放して自ら悟らせる」試みを一対一で繰り返すしかない。このような「出家と弟子」型の教育を現代社会で実現することは不可能である。

伝道が教育に移行するとき自律価値は背景に後退せざるを得ない。スポーツ&レジャーも教育実践に当たっては「ある程度」の手段化、社会的価値との融和を目指さざるを得ないだろう。自律価値を曖昧にする過程が「教育上必要」になるのである。

Ⅳ 価値関係の曖昧化教育

ここまでは以下のことを述べてきた；

- 1) スポーツ&レジャー教育は、知や技能ではなく、価値を伝える教育である。
- 2) スポーツ&レジャー教育は、この点で宗教伝道に類似する。
- 3) 伝道は教育の中で曖昧になり倫理に道を譲る。
- 4) スポーツ&レジャー教育もその範疇外ではなく曖昧さを要する。

以後では「自律価値と社会との調和を曖昧にしておく手法」について考えてゆきたい。

1 第一の方便：超越的教育＝人格による訓話的教育＝

一般に学校長は教科を指導することはない。教科担当者と異なり、知の領域と目標を持っていない。組織運営と管理が校長の主たる担務だが、教育者として学習者に向かう場合の校長の役目は教育目的の鼓舞督励が主である。

諸々の節目にあたって、学習者に対して時処位に応じた訓話を施す。一般に抽象度の高い「教育目的」を、学習者に呼応した概念くだきを施したうえで顕す言語翻案者である。校長はまた個別の案件に際しては、現場教師の判断が教育目的や理念に沿った形で実施されているかを判断する仲介者でもある。

校長訓話は各教科を超えている。知の伝達注入を目的としない。多くの場合行動指針や理念であ

り、倫理に深くかかわる。本論文のコンテキストでは、自律価値と従属価値を繋ぐ倫理的ブリッジともいえる。

訓話者としての校長には「ある程度の」論理性と曖昧さを糊塗できるだけの話術・感覚的な説得力および敬愛される人格が求められる。内容の是非ではなく、語る人間が尊敬されているかどうかの説得力の基となる。「だれのことばか」は問題だが、論理は気にされない。

特に話柄が当該機関の「教育目的」に直接かわるときは、論理を中心に語ることは危険ですらある。

「神様はいつでもみなさんを見守っているのですよ」と語った時は、その場で内容を納得させる必要がある。「神様のエビデンスは？」などという質問がでては困るのである。

曖昧さを耐え、担保する能力こそ、教育目的と教育実践を橋渡しする能力である。宗教家は神と人との仲介者といわれるが、教育機関では校長たちが抽象と具象の仲立ちに立っている。そこで活躍するのが「高潔な人格」の説得力であろう。

人格的な説得性と「ある程度の論理性」。権威と「柔らかな言論封殺能力」。自律価値と従属価値の調停者の能力であり、スポーツ&レジャー教育者に求められる能力である。

ここで伝道者的教育者の事例として、乃木希典を挙げてみたい。

教育者としての乃木は、ほぼ人格的説得力のみで学習院院長を務めあげた。乃木の克己心と明治天皇への赤誠を示すエピソードは枚挙にいとまがない⁵⁾。教育者としては、自らに対する厳しい桎梏を与え、それを異常なほど遵守する実行力で学習者たちの尊敬を得た。天皇への赤誠という教義を持つ、乃木教の伝道者である。

「あの先生は立派で尊敬できるから、どんなことでも言いつけに従う。」という服従意識は非論理である。合目的性や言辞の内容にかかわらない。学習者は自律価値の体现者として教育者を見て、服従に飛躍する。この種の人格的感化の例も無数だろう。「* *先生との出会い」などとする賛辞

献辞の数多さが証明している。

スポーツ&レジャー教育者には、この種の校長訓話的な能力が求められると考える。領域なく、教科なく、伝達情報なき「感得のみが可能な」スポーツ&レジャーでは、言語に依らず人による教育手法は利用可能な数少ない教育手段であると考ええる。

しかしこの立場は教師に対して「立派な人格者であれ」と要求する。「言語ではなく背中で」「教室ではなく日常で」さらには「公私をわけずに」教育せよ、とする。教師自身に対して、乃木のように修行者たることを求めるのである。「時代遅れの教師聖職者論」の変形だともいえる。現場の教員には呑み込みにくい盃ではないだろうか。

自律価値教育。言語と理性を介さずに価値を説得しようとするいとなみは、かくも「知識を伝達する」現代教育とは離れているということであろう。

2 第一の方便の陥穽 =徳目主義の誘惑=

一方でこの種の感覚的説得力はなんらかのドグマと結びついたとき、教条的な徳目主義に変身することが多い。乃木はその好例でもある。以下に乃木が学習院初等科の生徒に訓示した14か条の訓示⁶⁾を挙げる；

- 1 口を結べ。口を開いているような人間は心にしまりが無い。
- 2 眼のつけ方に注意せよ。始終キョロキョロしているのは、心の定まらない証拠である。
- 3 敬礼の時は先方をよく注視せよ
- 4 自分の家の紋所、家柄、先祖の事はよく聞いて忘れぬようにして置け。先祖の祭は大切であるぞ。
- 5 男子は男らしくしなくてはいかん。弁当の風呂敷でも、赤いのや美しい模様のあるのを喜ぶようでは駄目だ。
- 6 決して贅沢するな。贅沢ほど人を馬鹿にするものはない。
- 7 人力車にはなるべく乗るな。家で人力車をよこしても乗らないで帰るようにせよ。
- 8 寒中水で顔を洗うものは幾人あるか。湯で洗うようではいかん。

9 寒い時は暑いと思い、暑い時は寒いと思え。

10 破れた着物をそのまま着ているのは恥だが、そこを縫ぎをして縫って着るのは決して恥ではない。いや恥どころではない。

11 恥を知れ。道に外れた事をして恥を知らないものは禽獣に劣る。

12 健康の時は無理の出来る様に体を鍛錬せよ。けれども一旦病気になったら医者の方をよく聞け。

13 洋服や靴は大きく作れ。格好などにかまうな。

14 学習院の学生はなるだけ陸海軍人になれとは、陛下の御沙汰であるから、体の丈夫なものはなるべく軍人にならなければならぬ。

けれども生まれつき体の弱い者もあり、又種々の事情でなれぬ者もあろう。これも仕方がないが、何になるにも御国の為役に立つ人にならなければならない。国の為役に立たない者、或は国の害になる様な人間は死んでしまった方がよいのである。

(原文のニュアンスを保持したうえで読みやすく修正した。訳責筆者)

「軍人を目指せ」は時代背景を考えれば許容されるだろうが、役立たずは死んだ方がいいとか、弁当の風呂敷の色は地味に、服は大きく作っておくようにとか、顔は水で洗えとか、なんともこまごまと列挙したものだ。倫理的弧峯たる乃木の克己的日常のイメージと、風呂敷の色にがみがみ難癖をつける小姑の姿はどう考えても結びつかない。

これは人格的説得者・校長訓話的立場の特徴とディレンマをよく表している。高邁・抽象な教育目的と行住坐臥の徳目がつながらない。倫理的当為の理論的根拠を教育目的から導き出すのは難しいということである。

逆に言えば、徳目とは「今社会で通用している『べき』たちを集めただけのもの」である。徳目には論理的根拠などはない。強いて言えば「今あるモラルを守るべし」といっているにすぎない。

要するに、この14か条の説得力は常識と乃木自身の人格的背景のみに拠っているのである。

価値に言及せねばならない時、内実に乏しく空疎になりがちなスローガンの教育目的を語るより

具体的な徳目を示すことはごく一般に行われている。乃木はその好例だが、根拠はといえば「乃木大將が立派なお方だから」という以外にはない。

権威と人格を背景とした徳目絶対主義の欠陥がここにある。

徳目主義は根拠を提示せずに行動を促す。議を建てるなどという日本の風土や「文句を言わずにまづ従え」という、存在している倫理的規範に対する盲従を要求する風土がある。危険である。初等科生徒に対する訓示という点では批判精神発育を抑圧するという危険を持ち、高等教育以上の学習者に対しては教育者自らの人格的説得力を貶める自縄自縛の危険も加わる。

しかし、このアブナイ教育態度は日本史上決してまれなものではないし、現代でもよく観察される：

1) 「立派な人だから従う」権威主義や人格主義
2) 「つべこべ言わず従う」服従主義
— いずれも教育のある種の状況下では有効だし活用すべき手法ではある。「学習者に領域外の疑問を抱かせず、とにかく反復練習と暗記させる」方法は、知識の領域ではアーミーメソッドとして活用されているし、身体系教育では服従は優先されるべき学習態度だろう。

スポーツ&レジャー教育では、人格的説得力は大きく活用せねばならないが、徳目主義は二重の意味で排除されるべきである。

1) まず、徳目実行を命令するということ自体が、「社会調和のための」手段にすぎない個別徳目を自律価値化する立場であり、「実存の瞬間」の対極にある。
2) 次いで、「徳目への盲従による『実存の瞬間』が錯覚である、あるいは別種の社会価値実現のための手段になりかねない」という危険がある。例えば、学習者が「乃木の14か条」を毎日筆写するとしよう。書き進むうちに学習者は恍惚状態になり「実存の瞬間」を体感する。これを是とするかどうか。

原理的には筆写という行いも、顔を水で洗う行もスポーツ&レジャー体験足りうる。どんな修行でもかまわないのだから。

ということになると、スポーツ&レジャー体験と、政治や宗教で散見する熱狂的恍惚状態とは区別できないことになる。「国のために喜んで死ぬ」特攻隊や、自爆テロの原理を「実存の瞬間」として肯定せねばならなくなる。社会的価値と実存価値の衝突はここでも姿を現している。

スポーツ&レジャーの原理は行為の内容によらず実存の瞬間を称揚する。すると徳目主義は許容され、ある集団内で許容されているだけに過ぎない徳目が絶対的な当為として価値づけられる。かくして徳目絶対主義は跋扈する。爆弾を抱えて「実存の瞬間」に赴くテロリストの論理を許容することになる。

徳目主義を許せば「実存の瞬間」の美名のもとにあらゆる錯誤と異価値への排斥が許容されうる。これがスポーツ&レジャー原理が持つ最悪の欠陥といえよう。実存主義は社会価値に超然たるがゆえに自ら社会悪を招きかねないのである。ハイデッガーの「Das Mann」概念が国家社会主義に歪曲転用されたことは好例である。

筆者は爆弾テロの論理と倫理に首肯することができない。従って筆者は徳目主義をスポーツ&レジャー教育に適用することは不可とする。

徳目主義はいたる所に見られる。徳目主義は安易で効果的である。

以前の大河ドラマで流行した「なりませぬはなりませぬ」。「議をたてるな」という薩摩のエトス。乃木14か条も同類である。安易な分だけ危険は増す。

スポーツ&レジャー教育は徳目主義に乗っ取られる危険が高い分野である。自戒・持戒せねばなるまい。

3 第二の方便：寛容主義教育 = 「何でもよい」と「なにもない」の狭間＝

スポーツ&レジャー教育では、徳目主義のいわば対極に位置する姿勢がある。「すべての領域での活動を対象とする」態度である。

スポーツ&レジャーは対象領域を持たない、行為者の心理的な境位である。従ってこれを教育しようとするとき、教育者と学習者の間には領域を巡って混乱が生まれ得る。

「先生、なにをやればいいんですか？」
「なんでもいいから一生懸命やってごらん。いつかきつとすてきな瞬間が訪れるから⁷⁾。」

スポーツ&レジャー教育は領域を持たないから、時としてこういう方便的言辞がでてくることは仕方のないことだろう。曖昧さが必要になる場である。スポーツ&レジャー教育を一般化して語ると、このように原理だけでは「学習者になにかひとつの良きアイティムを与え、一生懸命やらせる」以上のことは言えなくなる。

類似するものは禅の止観や行住坐臥の思想かもしれない。何をするか・どうするか・うまくやりたい・やったらどうなるか などの雑念を払ってどんなことでも「ただやる」。今ここにあるものを是認しつつ、内面の克己を要求する…一般的化して表現するならこのようになるが、個別の行動を記述しきれているとは言えない。ここでは指導僧が修行僧の意思と能力を見極めて適切な領域指定と助言が常に行われている。

スポーツ&レジャー教育では禅の修行のように個別に指導することは難事であるが、指導者の立場は類似している。「なんでも良い」を「なんにもない」にしないよう「何かを設定する」段階が肝要である。むしろこの何事かのきっかけを設定提供するというわががスポーツ&レジャー教員に要求される最大の資質なのかもしれない。

4 第三の方便：知の運動 =過程知教育=

ここで教育領域の有無から教育を分類弁別して、スポーツ&レジャー教育に応用可能な立場や手法を洗い出してみたい。

試みに、教育をその目指すところによって3種に分類してみる。

1) 知識知 (と試みに名づける。) 知識取得のための教育。ある領域での言語化され共有可能な「知」を学習者に伝達することを目標とする教育

である。「会計士合格の基礎知識」「実用英語3級突破単語」などがこれにあたる。仮に「知識知」と名付ける。天文学は天体、英文学は英国と文学、いわゆる知識の大部分はその知識自体に価値があるとされる。どの知識も一定の秩序だった領域なくしてはなりたない。

2) 手段知。いわゆるノウハウである。「おいしいカレーの作り方」など。知識を駆使して何事かを想像するための手段や技巧を秩序化したものといえる。これを「手段知」と呼ぼう。手段知は秩序だった従属価値の大成だということもできる。

3) 過程知。知識知や手段知の習得作業自体に意義と効果を見る立場である。習得をしていくという過程自体が学習者の頭脳や身体統合の能力を発達させる。知識を得る「ために」行うのではなく、頭脳の統合能力や把握力などを練磨する「ために」行う。領域は問わない。一般にいうさまざまな「能力」を開発する営為である。

過程知教育は、領域を問わないという点でスポーツ&レジャー教育に類似している。

過程知を重んじる「学問」に哲学がある。哲学も対象領域を持たない。知という頭脳運動のみ存在する⁸⁾。この点哲学とスポーツ&レジャー教育は近似しているといつてよい⁹⁾。

過程知という考え方はスポーツ&レジャー教育実施に援用できると考える。どんな領域でも対象化して「なに・なぜ・いつ・どこ」などの主知的分析を加えることは対象物を理解し「好きになる」過程の第一歩だからである。

ここでスポーツ&レジャー教育はいわゆるリベラルアーツ、教養教育に極めて近いものになる。「どんな領域でもいいから」「一生懸命学ぶ」ことの奨励が第一歩となる。

重要な相違点は、教養主義は教育目的への志向が希薄で、価値教育に対しては相対主義的立場を取りやすく、主知主義にとどまる。これに対して、スポーツ&レジャー教育の最終目的は「実存の価値を感得させる」という価値主義にある。過程知教育は確かにスポーツ&レジャーのめざす方向にはあるが、主知主義と価値主義の差異には留意しておくべきである。主知主義的手法はあくまで「方便」なのである。

こうして我々は；

- 1) 宗教伝道の手法の中にスポーツ&レジャー教育に近似する立場を見出し、
- 2) 価値転換を強要する立場からは「ひとまず離れて」曖昧さを許すことにより、
- 3) ①人格的説得力という態度、②寛容な領域提示の技、③主知主義的な教育手法を手に入れた。

次稿ではこれらにのっとった「教養主義的なスポーツ&レジャー教育」の構造を考察してゆくことになる。

注1：「スポーツ&レジャー教育の方向性と課題」
久保・栗原・恩田・松浪・伊藤 「スポーツ&レジャー教育の課題と実践について」 東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科刊 2012

注2：「スポーツ&レジャー教育の方向性と課題2」
栗原・伊藤・恩田・松浪・久保 前掲書 2012

注3：「マネジメント概念の検討」 伊藤・栗原・松浪 東海大学体育学部紀要 2013

注4：この世対あの世という巧みな二項対置による自律価値の称揚は、宗教行為のいたるところにみられる。特に現世と来世を峻別する厭世的な教義を持つ宗派では、「あの世のすばらしさ」を巧みに広宣することで信者を継続的に獲得してきた。

いわく、この世はつらいことばかり。あの世では楽な生活をしたい。その「ためには」この世のつらいことも我慢しなさい。そうすれば救われるだろう。などが基本的な惹句である。

スローガンは至る所にみられる。欣求浄土穢土厭離しかり、免罪符しかり、巡礼者の聖墳墓教会訪問しかりである。

ここで強調したいのは、現世での行いの「善悪」と幸福、また来世での救いにはいかなる論理的関係もないことである。単に高位の聖職者が権威をもって語っていたり、教義に書いてあるというだけのことである。カントがこの「徳と福の不一致」に悩み、天国を「論理的に要請した」ことはよく知られている。

注5：軍人としての乃木には司馬遼太郎の鉄槌以後

ほぼ沈黙が続いており、散発的あるいは一部分だけ論じた反論のみ散見される。乃木評伝としては「乃木大将と日本人」S. ウォッシュバーン（講談社学術文庫 1980）、「乃木希典」福田和也（文春文庫 2004）、「殉死」司馬遼太郎（文芸春秋 1967）があるが、いずれも軍人としての乃木に対しては慎重に言及を避けている。ここでは司馬の評価は消極的にせよ定着しているのとらえておく。

このほかの乃木の情報はネット検索に拠った。「教育者としての乃木」でネットを詳細検索すると 9 件ヒットする（2015 年 1 月 18 日）。

http://search.yahoo.co.jp/search?p=%22%E6%95%99%E8%82%B2%E8%80%85%E3%81%A8%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%AE%E4%B9%83%E6%9C%A8%22&aq=-1&oq=&ei=UTF-8&fr=top_gal_sa&x=wrt

これら 9 件はいずれも 乃木の人格の高潔性や武士道精神を礼賛するもの、あるいは 非合理的な精神主義を批判するものとして、「昭和天皇への雨合羽指示」や「左右同じ靴」などのエピソードを紹介している。学習院長としての行動や教育方針などを直接記述したものは見当たらない。

注6：学習院 HP http://www.gakushuin.info/2012/12/post_286.html

注7：2014 年東海大学体育学部望星ゼミナール上での、東海大学名誉教授西野仁の発言。同セミナーの中で西野は、スポーツ・レジャー同質論を主張した。スポーツであれレジャーであれ、活動の領域を問わず、行為者にとっては同質なものであるとする。

注8：哲学講義の多くは歴史上のいわゆる哲学者と称される人物の思想や評伝を吟味することに費やされるが、これは思想史あるいは人物分析とでも呼ぶべきもので、哲学という知の運動とは別物である。

注9：哲学とスポーツ&レジャー教育がやや異なるのは、その視点であろう。哲学は主知主義的で物事を観照する。スポーツ&レジャー教育は倫理主義的で人間の価値を高める営みに傾注する。